



讃仰講演会 戸次 公正 氏（大阪教区南溟寺住職）

2014年2月18日

「伝統を現代に—お経・正信偈の心を子や孫にわかる言葉で—」

【極樂のはなしをしよう

—阿弥陀経のあらまし意識—】

今日は御遠忌讃仰講演会にお招きをいただきまして、どれだけ十分なお話ができるか、ころもとないものもごさいますけれども、一緒に親鸞聖人の教えに、私たちの現代の確かな道しるべを尋ねてまいりたいと思いますので、最後までお付き合いのほど、よろしく願いを申し上げます。

まずは「極樂のはなしをしよう—阿弥陀経のあらまし意識—」の朗読をしてみたいと思います。いつでもご法事などで読誦されています『阿弥陀経』というのは、どんなことが書いてあるのかということを感じてみたいと思います。



あれは、お釈迦さまが祇園精舎におられた時でした。そこには舍利弗を始めとする、1250人の弟子たちや神々も、精舎で衣食を支給される人々も座につらなっていました。

私はここでお釈迦さまが、智慧第一にすぐれた人である舍利弗に向かって、まるで独り言のように語り出された教えを、確かにこの耳で聞いたことをごさいます。

『舍利弗よ、ここより西はるか、十万億の彼方を過ぎて極樂という世界がある。そこには阿弥陀という仏がおられ、今、現に法を説いておられる。これから極樂の話をしてしよう。』

舍利弗よ、想像してみるがよい。極樂の風光を。その国の入り口や周りを囲む柵も、天を覆おう網も、立ち並ぶ樹木も、全て宝石でできている。庭園には七つの宝でつくられた池があり、清らかな水がたたえられ、大きな蓮の華が咲いている。それらは青や黄色、赤や白い色で、その色の光を放っている。天には幾つもの音楽が奏でられ、天の華（マンダラケ）が降り注ぐ。さまざまな鳥たちが鳴いている。その中には極樂にしかない人面で美声の鳥、迦陵頻伽や、一体に2つの頭を持つ共命の鳥もいる。

ここには地獄・餓鬼、畜生という人間であることを奪う悲惨な境遇はない。この国では本願によって永久の平和が成就しているからだ。かすかに吹く風が宝の樹樹を渡ると、鳥の歌声と共に、仏・法・僧を念ずるところを呼び覚ます。

○ 御遠忌通信



舎利弗よ、かの阿弥陀仏の光は量りなく何ものにも妨げられない。また、その寿命に限りがないから、阿弥陀（無限なるもの）と名付けるのだ。

あらゆるいのちあるもの（衆生）は、極楽に生まれたいと願うべきだ。なぜなら、この国では共に生きることの根拠にふれることができるからだ。男であれ、女であれ、人が阿弥陀仏の名を聞き、ひたすらに称えるならば、いのち終わらんとするとき、目の当たりに阿弥陀仏が現れる。その人は極楽に往き生まれる。

阿弥陀仏のすぐれたはたらきを、東・南・西・北・上・下の、六方の世界中のガンジス川の砂ほど数多くのみほとけたちが称讃している。

舎利弗よ、私の教えは濁りに満ちたこの世界では極めて信じ難い。それでも人々の幸いのために私は説かずにはおれなかった』。お釈迦さまの話を聞き終えた人たちはみな、あの闘いの神、阿修羅も、身とところに深い喜びを抱いて、礼拝して去って行ったのでございます。

【法事を現代語訳で】

私は20年ほど前から、法事のお経を日本の現代語訳で読む試みをしております。普通は僧侶が漢文で音読するのを、みなは後ろで聞いているだけでありますが、私はこうした従来の作法にのっとった法事も致しますが、その場合でも訓読、つまり読み下し文を読むことも含めて、現代語訳のお経のテキストを配り、今の『阿弥陀経』もその一つです。参加者と一緒に朗読するお勤めを加えています。

私は寺に生まれ育ちながら、子どものころから、子どもごころに、漢文の音読のお経がちんぷんかんぷん、意味不明なのに疑問を抱いてきました。キリスト教の『聖書』みたいに、読んで分かるお経がなぜないのかと思ったりもしました。

大谷大学で仏教を学び始めたころ、岡崎教区の櫻部先生が指導教授で、そのときに仏教学を学ぶその基礎の一つに教えられたのが、木津無庵が編纂した、日本初の日本語訳のお経による仏教聖典、『新訳仏教聖典』。現在復刻もされています。それを元にして形を変えたものが、今では主要なホテルの客室に『聖書』と並んでいる『仏教聖典』。ホテルへ泊まったら、キリスト教の『聖書（バイブル）』と一緒にこれがたいてい置いてあります。



この中にも、実は大乗仏教から原始仏教まで、そして私たちに親しみのある『浄土三部経』も抄出意識が成されています。これらを資料にして私は、独自のお経の本をつくりました。内容は『浄土三

○ 御遠忌通信



部経』を抄出意識したものと、親鸞聖人がおつくりになった『正信偈』。そして「三帰依文」など組み合わせまして、一冊の聖典として、法事の場で朗読をしています。

例えば、法事の最後にお勤めをする回向も、漢文で聞いているだけでは分かりません。「願以此功德 平等施一切 同発菩提心 往生安楽国」。「願わくばこの功德をもって平等に一切の施し、同じく菩提心を起こして安楽国に往生せんと」。訓読しても分からない。現代語訳しますと、「御仏の願いの大きなはたらきが全てのいのちに平等に恵まれて、目覚めを求めるところを一つにして、共に生きる世界に向かって、終わりのない歩みを続けていくことを」という意味になります。これなら少しは、こういうことなのかと分かる。

やり始めた当初は、お年寄りには違和感を持たれかなり反発されました。あんたみたいな人に、もう法事をやってもらわんでええわと怒られました。ここ20年でお年寄りの意識がだいぶ変わりました。

私がこのことを、NHKのラジオ放送で2回ぐらい話しておりますが、反響が大きくて80、90のじいちゃん、ばあちゃんたちから電話がかかってきて、私はそんなお経をやってほしかったという時代にちょっとなってきました。

【お経って何が書いてあるの？】

始めのころから受け入れてくれたのは青少年。若い人たちは何よりも、意味の分からないお経を後ろで黙って聞かされているより、じっとして足が痛いけど退屈しない。お経にはこんなことが書いてあるんだ。『観無量寿経』は事件なのか。なんでこんなものがお経なのかとびっくりしています。

私が『正信偈』を意識したのも、東本願寺の夏の集いへ、中学生や小学生が話を聞きに来たときに、中学生から、「おっちゃん、この『正信偈』って、いったいどういう意味やねん」と聞かれて、ずっと即座に答えられなかったから、何とかしようと思い、仲間と一緒に学習して、『正信偈』の意識もつくってみました。

一番抵抗が強いのは宗門の僧侶の方たちでございます。中には賛同者もいますが、多くは、「あんたがやっているこういう試みはありがたみがない。だいたい漢文でないと深い意味が伝わらないもんや」と、だいぶ叱られたり致しました。「漢文でないと伝わらないというのは迷信と違いますか」と言い返したら、「何ということ言うか」とよく怒られました。日本の仏教徒の最大の忘れものというのは、全てのお経を日本語訳しないまま、ずっとやってきたことだと思います。

漢文で読むお経というのは、江戸時代の檀家制度の中で習俗化され、宗派意識で儀式化されてきた仏教のお経を漢文で音読する、その伝統のみを荘重なものとして保守し、固執し続けているのではないかと思います。

でも、お経とは本来目覚めた人、仏陀の教え。それは慰霊・鎮魂の呪文ではない。幾らありがたい、

○ 御遠忌通信



私たちにとってかけがえのない真実の教え『無量寿経』であっても、漢文で読誦するときには『般若心経』と変わらない、慰霊・鎮魂の呪文のようにしか聞こえてこないことがあります。それでは個々の自覚と他者との共存の知恵を、そこから見い出そうということがなかなか、縁が生まれにくいのではないかと思います。

お経の根底には、非戦平和の願いと、あらゆるいのちあるもの、衆生と共にという精神が流れています。読んで分かる、聞いてうなずけるお経に出会うことこそが、それがきっかけになってこそ、より奥深い仏教の世界へのアプローチになっていくものだとは私は思って、現在も続けております。

【伝統とは何か】

次に「伝統とは何か」ということ。私たちは自分がやっていることが、だいぶ昔から、これが伝統だと思ってやっていることが実は、割と新しいことであったりします。小林秀雄という文芸評論家のエッセーの中に、「伝統について」という一文がございます。この中で、小林秀雄はこういうふうに言っています。

「伝統と習慣は違う」。習慣というものは私たちが非常に無意識の状態においてやっている。くしゃみをしたときに口を隠す、朝になったら、おはようと言う、顔を洗う。これが習慣ですね。そういうしぐさとか習慣というものと伝統とは違うのだ。

「伝統というものは、ある種1回 客観化して、主体的に受け取り直すものなのだ」。

われわれも常識だと思ってしまっておりますが、お墓で何々家の家というのが当たり前となっております。しかし、これは明治の半ばにできた制度です。明治の「民法」が制定されたときに、家制度というものと家族国家が制定されて、その中でできてきた制度です。古くからの日本人のお墓の体系というのは、ああいうものではありません。

私たちはある年代を経て、まさにあれが伝統であるというふうに思っているわけですが、日本人の多くのお墓の制度というのは、もっと古く遡ってみると、本来はもっと違ったものであったということが分かってきています。

小林秀雄はこうも言います。

伝統というふうに私たちが考えているものは、ある特定の時代性や社会的制度に基づいてつくられてきたものであって、伝統を引き受けるということは、まさにそういうことなのだ。

主体的に一回客観化して受け取り直すということが抜けたら、ただの習俗や形骸、因習になってしまう。そういう非常に大切な指摘を、小林氏はしておるのではないかと思います。

【親鸞聖人はなぜ「正信偈」と「和讃」をつくったのか】

○ 御遠忌通信



私が『正信偈』の現代語訳、意識をするのは、決して私の勝手な思い付きではありません。実は親鸞聖人に学ぶ、親鸞という人の思想や教え、生き方、そのお仕事に立ち返ってみれば、そういうことを日本で最初にした人ではなかったか。

『正信偈』という偈は歌の形です。「親鸞はなぜ『正信偈』と『和讃』をつくったのか」。

念仏が禁じられました。承元の法難で弾圧をされ、法然、親鸞は引き裂かれ流罪になった。仲間四名は死罪になった。

念仏は親鸞聖人のそのときだけではなしに、生涯にわたって、最晩年に至るまで念仏は、時に触れ、折に触れて禁止され弾圧されてきたわけです。今の私たち、この信教の自由の時代とは、おそらく相当な隔たりがあります。あの時分に禁じられた念仏を称える。念仏を人に勧めるということは、命懸けのことであつたに違いありません。

禁じられたからといって止めるわけにはいかない。隠してしまうわけにもいかない。でも、埋もれさせてしまうわけにもいかない。法然上人から受け継いだ本願念仏の誠を、南無阿弥陀仏の念仏の声を、真実の闇に埋もれさせないためには、武装して立ち上がるわけにはいかない。仏教徒ですから。

できることは何か。言葉と歌を武器にすることです。禁じられた念仏の真実を闇に埋もれさせてしまわないために親鸞は歌をつくった。歌というものにはそういう力があると親鸞は信じていました。

もう一つの「和讃」というのがある。『三帖和讃』ですが、これは、私は「和讃」には非僧非俗の精神を表現するという意味が込められていたのではないかと考えています。

もちろん、仏徳讃嘆する報謝の歌ではありますけれども、そこに非僧非俗、僧にあらず俗にあらずと親鸞聖人が自らの社会的位置付けをした。そのこと、そのころを表現するために、もう一つの漢文ではない日本語の歌をつくった。これが「和讃」ですね。

考えてみますと、真宗の伝統の源は弥陀の本願であります。そして、その弥陀の本願のいわれを解き明かしたのが『教行信証』です。つまり、弥陀の本願のいわれ、仏願の生起本末を六巻の書に表したのが、『顕浄土真実教行証文類（教行信証）』。その中に漢文の詩として、七言六十行百二十句の『正信偈』が歌われた。

さらに、親鸞さまは「和讃」をつくった。「和讃」は最晩年に、75歳から84歳ごろまでの間に、まさに親鸞の詩人の魂がふつつつと湧いてくるかのように、5百余首もの「和讃」を生み出された。それを私たちは今お勤めをしておるわけですが。

しかも、その「和讃」の形式は和歌のように五七五七七でない。「今様」という七五調でつくられた。七五調というのは、「今様」と言ひまして、そこに書いてありますが、その当時の平安時代から民衆の間にはやった流行歌です。それを集成しましたのが『梁塵秘抄』^{りょうじんひしょう}という書物です。これは、後白河法皇が採集しました。「今様」を今日に伝える功労者が後白河法皇です。後白河法皇といひますと、頼朝に日本一の大天狗と言われた第77代の天皇です。源氏と平家を手玉に取りながら、したたかに乱

○ 御遠忌通信



世を生きぬいた天皇です。

後白河は若いころから「今様」、流行歌に熱中しています。しかも、師匠は乙前という年老いた白拍子、元遊女の乙前という女性を師匠と仰ぎ、御所にも招き入れて、はやり歌の全部、その節、言葉、歌詞から聞き採って、編集して本を著した。これが『梁塵秘抄』です。素晴らしい本です。

しかし、これはいつしか世の中に埋没していきました。『梁塵秘抄』が再発見されたのは明治の末、写本が見つかりまして、現在では文学史や社会史の貴重な遺産として研究されて、今日では何冊もの文庫本にまでなって、岩波文庫を始め、親しく読むことができます。開いたら知っておる歌がいっぱい載っています。

「ほとけは常にいませども、うつつならぬぞあわれなる。人の音せぬ暁にほのかに夢に見えたまう」。聞いたことがありますか、これが『梁塵秘抄』です。「今様」。親鸞の和讃に似ています。有名な歌は、「あそびをせんとや生まれけん。たはぶれせんとや生まれけん。あそぶ子どもの声聞けば、我が身さえこそゆるがるれ」。

この「今様」、はやり歌は民衆の中で、それこそ老若男女、貴賤上下のあらゆる階層で愛唱されていました。親鸞が「今様」のサイズで「和讃」をつくったということに大きな意味がある。まさに、僧にあらず、俗にあらずという精神が込められているのではないかと思います。

ですから、「和讃」を私たちは今日、例えば『恩徳讃』を1番、2番、3番のメロディーに乗せて歌うことがございますが、親鸞さまの「和讃」を「弥陀成仏のこのかたは」の讃でも、「如来大悲の恩徳は」でも、現代歌謡のメロディーで歌ってもいいのです。私は、どんなメロディーが合うかいろいろ試してみいました。『青い山脈』でも合います。七五調ですからね、演歌のルーツなのです。「お酒は温めの爛がいい」。

それと、『恩徳讃』を私どもは唄うけれども、「如来大悲」しか歌いませんが、私は、「如来大悲」の前の2首、「三朝浄土」「他力の信心」そして「如来大悲」、この3つの和讃をセットにして、1番、2番、3番の『恩徳讃』として歌ったらどうだろうかという試みをしております。

そのときに、一番合うメロディーは何だろう。『恩徳讃』の資料が入っていると思うのですが、今日はあえて私が探り当てました、これで歌ったらいいなというメロディーを紹介します。皆さんもよく知っている曲です。あまり知らない歌はあきません。みんなが知っているものでないと。

『琵琶湖周航の歌』。「♪われは湖（うみ）の子 さすらいの 旅にしあれば しみじみと」。森繁久弥や加藤登紀子が歌ったあれです。吉田千秋作曲、『琵琶湖周航の歌』のメロディーで『恩徳讃』を、「三朝浄土」を1番として、「如来大悲」を3番として一緒に歌ってみたらと思います。皆さんもこの試みに参加していただけたらと思います。歌うのが嫌だという人は無理にとは言いません。

「♪三朝浄土の大師等 哀愍摂受したまいて 真実信心すすめしめ 定聚のくらいにいれしめよ/
他力の信心うるひとを うやまいおおきによるこべば すなわちわが親友ぞと 教主世尊はほめたも

○ 御遠忌通信



う／如来大悲の恩徳は 身を粉にしても報すべし 師主知識の恩徳もほねをくだきても謝すべし」。

何をもったいないことをするのかとお怒りの方もおられるかもしれませんが、こういうことも初体験だと思しますので、試みていただいたらいいかと思ひます。

【蓮如上人の宗門改革】

ここでヒントを与えてくれたもう一人が蓮如上人です。蓮如さんは親鸞聖人が亡くなって2百年後の時代に本願寺の八代として継職した方ですが、蓮如さんの大きな仕事はいろいろあるかと思ひますが、私なりにそれをまとめたら5つあると思ひます。

① 親鸞の『正信偈』、「和讃」を出版・公開した。

広くみんなと一緒に『正信偈』『和讃』でお勤めできるように変えた。しかも、

② その『正信偈』と念仏と「和讃」をセットにした勤行で「同朋唱和」というものを確立した。

それまでは天台宗の末寺のようなかたちであった本願寺を独立させて、そのために闘い、いのちまで狙われて逃げ回るわけですが、親鸞の教えにのっとりた真宗の伝統を打ち立てるということで、『正信偈』という親鸞の漢文の歌、「和讃」という親鸞の日本語の歌を組み合わせると念仏と共に「同朋唱和」という真宗の儀式の原型を確立していったのであります。しかも、

③ 儀式は「平座」で

平座というのは上下、内外のない平等の空間。蓮如上人の当時の報恩講の一座を、かつて蓮如上人500回御遠忌法要を大阪教区で勤修したときに、復元法要として仁科和志さんという式務員の方と議論しながらやってみましたが、非常に斬新なものでした。

内陣、外陣は一応ありますが出入り自由だし、どこに座ってもいい。蓮如さんが座ったところが上座。あとはみんな平等。足袋も履かない。着ておるものも粗末な装束です。それで「同朋唱和」ということが行われていたということが、歴史的なものを調べていきますと判明して、復元法要をすることができたわけです。

今私たちのお寺や教団でも、本当の意味での平座という伝統をどこか見失ってしまっているのではないかと思ひます。『正信偈』念仏と「和讃」、「同朋唱和」、そして平座による全員参加型の勤行。こういうものをもう一度復興するとか、回復していくということも必要ではないだろうかと思ひかけです。

④ 「御文」を発信した

「御文」というのはお手紙。「御文」は手紙なので最後に、「あなかしこ」。それをみんなが回し読みして、また書き写してずっと広がっていった。ある人は言いました。蓮如さんはダイレクトメールの元祖だと。これらのことによって、

⑤ 真宗の生活文化が「土徳」というものになっていった

○ 御遠忌通信



「土徳」という言葉が真宗の文化の中にあります。土の徳。つまり、大地に根付いて、地下水となり私たちの道を求める心が信心を起こすことによって汲み上げられ、手渡されていく。その「土徳」が日本列島の津々浦々に隈なく張り巡らされておりますので、縁があってその「土徳」は、今また形を変えて現れてくる。

忘れ去られていたものも、歌を忘れたカナリアが思い出すようにまた念仏を称え、『正信偈』を歌い、「和讃」を唄えば、また取り戻すことができるように、必ず「土徳」というものが私たちを育てていく。この「土徳」というものを大切に、失わないように、私たちは本当の伝統として見つめ続けていかなければならないと考えています。

【極楽から吹く風に聞く】

『阿弥陀経』を最初に読みましたのは、極楽から吹く風の便りが聞こえてくるようなものが『阿弥陀経』の内容だからです。昔は、「極楽の余り風」という言葉がありました。極楽から吹いてくる風が夏にずっと流れてきたら、ああ、極楽の余り風だと、昔のお年寄りには喜ばれたと聞いたことがあります。

死んでしまった人が極楽へ還って行かれた、お浄土へ参られたと言うことがいつの間にか言わなくなりました。いつの間にか、死んだ人は天国から見ているということになった。仏教徒であっても、天国からお父さん、お母さんが見ている。本当かな。

この頃では千の風になって。風になったと考えるようになりました。私は墓になんかおらんぞと言われた妙好人もいらっしやいましたが、それはちょっと意味が違います。お浄土へ還った。そう言っ



てきたのが私たちの伝統です。われわれもそのことを何となく聞かなくなっていました。なぜ、極楽とか浄土に還ると言わなくなったのか。

それは、近代の仏教者が、ともすれば極楽を実体化してきたことに対して、それを批判的に捉えているあまり、極楽という言葉が実体化されてしまう「あの世」を古くさい表現として切り捨ててきたからかもしれない。

しかし、親鸞さまはいったいどういう意味で、極楽とか浄土という言葉を使われたのか。『正信偈』とか「和讃」を読んだら当然、そうだったなと頷けるわけですがけれども、そのこともどこかで見失われているような気がします。

極楽という言葉をお経の中で、漢文で最初に翻訳した人は、中国の鳩摩羅什です。『阿弥陀経』とか『法華経』を翻訳した三蔵法師。この人が初めて翻訳の言葉として原典、『阿弥陀経』ではスカーバテ

○ 御遠忌通信



イー。「幸あるところ」という語を漢文に置き直すときに、極楽という言葉を使います。そこから後には、極楽浄土という四字熟語にもなってきた。やがて、日本の浄土教では、臨終の際には阿弥陀仏が極楽の方からお迎えに来られるという民間信仰にまでなっていくわけです。そういう浄土教の流れを受けまして、法然上人、親鸞聖人は独自の極楽観というものを見出していかれます。

親鸞聖人は『唯信鈔文意』という著作の中で、極楽というのは無上涅槃の悟りを開くことである。また、滅度である、無為であるという。そのころを汲んでいくと、極楽というのは「苦しみの現実から解放された、完全に自由な状態」を表します。

涅槃というのは、2月15日がお釈迦さまの命日、涅槃会でしたが、お釈迦さまの最期、お亡くなりになったことを涅槃に入ったといえます。

『正信偈』にも涅槃という字が3回出てきます。煩惱の火が消えた寂靜の絶対平和の状態を言うわけです。つまり、極楽というのは、そういう意味からしますと、苦しみとその最たるものである戦争などのない絶対平和の樹立の状態を意味するとうかがえます。

その根拠は何かというと、本願がそもそも、四十八願の第一願で地獄、餓鬼、畜生、戦争、貧困、差別のない国をつくらうという願いで打ち建てられたからであります。そういう解放への祈りを受けて、「南無阿弥陀仏」を成就した本願念仏の教え、涅槃寂靜という世界は、絶対永遠なる平和の世界を表していると、私は考えております。

ですから、極楽では『阿弥陀経』にもありますように、死んでからでもない、過去でもない。今現在、「今現在説法」。過去も未来も含む現在という悠久の時間軸でわれわれに帰命せよと呼んでいる、その声に呼応するのが「南無阿弥陀仏」。そのとき、極楽が目の当たりに現れてくる。それは、死者たちと生者たちも共に存在する時間と空間である。

戦国時代の日本に吹いた極楽の風がありました。日本の中世、戦国時代はまさに戦乱に明け暮れた、信長、秀吉、家康の時代でありますけれども、しかし、そのまっただ中にある民衆の生活の中に、極楽という仏教の世界観を実現する場が現れました。ここに書いてありますように、「無縁・公界・楽」という場です。

無縁というのは、最近では無縁墓とか無縁さんとか、あまりいい意味では使われなくなりました。見捨てられてしまったという意味ですが、本来は無縁といえは無縁の大悲からきている。あらゆるものを受け入れるという、つまり、世俗の一切の支配から無縁なものを引き受けていく。それは公界ともいいます。公権力や外部の争いや、戦争に関わりなく平和を維持するのが公界。つまりアジール（避難所）、駆け込み寺、そういうものがつくられていった。

もう一つ、楽というのは自由に商取引をする、楽市・楽座というフリーマーケットのことです。これは戦国時代におのずから民衆の中に生み出されていった。「無縁・公界・楽」は仏教語であり、非常に真宗に縁の深い大切な言葉です。

○ 御遠忌通信



千利休の極めた茶の湯も、この公界の一つです。茶席では武器を持たず、敵味方なく一服を喫する。そういう寂靜にして平和な座が実現した。そういう伝統こそ日本の真の伝統であります。その極樂を私たちは、一人ひとりの生き方の中でもう一度見出して、時を取り戻さなければならない。

時代が流れてこの極樂浄土に通じるような思想が西欧にも現れます。この極樂と同じような、永遠にして平和な状態を願う思想を初めてお立てになった人は哲学者のカントという人です。カントは、『永遠平和のために』という著作を著しています。

それを読みますと、まさにこれは極樂のことではないかと言いたくなるような、永遠平和はどうしたら実現するのか。1795年にカントは『永遠平和のために』という論文を発表しております。

現代では、ジョン・レノンの『イマジン』にも極樂の風が吹いています。歌詞の中に、こんな一節が出てきます。「イマジン、想像してごらん。天国も地獄もない。国境もない空っぽの世界を。殺したり、死んだりする理由も、対立をあおる宗教もない。平和で静かな世界で暮らしている姿を。欲張ったり飢えたりする必要もなく、みんなで世界を共有している姿を。イマジン、想像してごらん」。これが『イマジン』の歌詞です。これは極樂でしょう。

今こそ、極樂という言葉、私たちはもっと積極的に使わなくてはならないのではないかと思います。

【伝統を現代に】

仏教の精神を現代に伝える四字熟語があります。膨大な仏教の四字熟語の中から特に真宗に関係のある言葉、皆さんもどこかで聞いたことのある言葉を挙げます。一つずつ簡単にその意味を紹介致します。

「十方衆生」「兵戈無用」

「十方の衆生よ、あらゆるいのちあるものよ」と呼び掛けた本願があります。衆生というのは、大事な世界観であります。「三帰依文」をお唱えしたときに私たちは、自ら佛に帰依したてまつる。まさに願わくは、「衆生と共に」という。ここに出てくる。自ら法に帰依したてまつる。「衆生と共に」、自ら僧に帰依したてまつる。まさに願わくは「衆生と共に」という言葉が付いているわけです。

あまねく衆生と共に「普共諸衆生」『願生偈』の文です。衆生と共にというのが仏教です。特に大乘仏教のいのちです。ところが、私たちはこの「衆生と共に」をどこかで忘れていた。私が三宝に帰依する、人間である私の目覚め、真実の知恵。これはもちろん大事ですが、厄介なことになかなか難しいことです。自分だけが、人間である私だけが仏に帰依したら、法に帰依したらいいという話ではない。いつでも「衆生と共に」という課題を背負っている。なぜ衆生が出てくるのか。お釈迦様の不殺生、非暴力の教えだからです。あらゆるいのちあるものと共にという十方衆生と本願を共に生きるも

○ 御遠忌通信



のだから。

私たちは衆生を差別します。チョウチョやトンボや、クジラやイルカは大事にしないといけません。ゴキブリ、ハエ、ダニやムカデは嫌いで、殺虫剤で殺してしまいましたが、あれも衆生です。あれもと言ったら怒られる。あっちの方が本来衆生。人間も衆生の一つに過ぎないわけです。いろいろないのちあるものの、人間というのは、その衆生の一つに過ぎない。

なのに、いつの間にか人間中心、人間至上主義で偉そうに人間がのさばって、ほかのいのちを管理するように、コントロールするようになってしまった。衆生に対する冒瀆。これではいかんと思うのですね。

やっぱり、私たちはもっともっと厳粛に衆生の声に耳を傾けていかなければならないのではないかと思います。木や花や草も衆生です。木や花や草も、もの一つ言いませんけれども、そこに植わって、根を生やし、枝を広げて、花を咲かせて、散って、種になり、枯れ葉を落とす。この営み、その姿自体が自然の法、その教えなのです。それは衆生の教えなのです。それに耳を傾けていかなければ。

仏法を聞くといっても、学ぶといっても、そういう自然のありさまに目を凝らし耳を澄まし、空気の澄み具合に息づかいを整える。そういうことが何より大事な仏道修行だと私は思います。

本の中、聖典の中だけに仏法があると思っ込んでいると、頭でっかちになってしまう。だから、夏には夏、冬には冬の、暑さ寒さの中で樹木のそよぎや、そこに翼を休める鳥たちの声に仏法を聴聞しないといけない。

セミやオケラ、ミミズ、ムカデの虫たちもまたいのちの道理を教えてくださいな衆生なのです。その「衆生と共に」ということを忘れないように。できるどうかはともかく、大変なことです、本当に。矛盾なく衆生と共にということ課題にしていくとなったら。

でも、「三帰依文」には、衆生と共にという言葉が出てくるのです。言葉で言うほどたやすいことではないなと思っながら、それは衆生を見失っている。人間も衆生の一つでしかないのに、いつの間にか人間至上主義的な妄念、妄想にとらわれ、人間以外の衆生は人間の都合のいいように利用したり、排除したり、破壊してもよいと考えている。

だから、平気で日本列島各地に原発をつくって、何が何でも推進することを是としたわけです。3.11の大震災、大津波、原発事故を受けて、そんな人間の在り方を、「衆生と共に」という観点から、新たに問い直していかなければならない。「一切の衆生と共に」というのは、そういう大きな課題につながってくるわけです。

「兵戈無用」も『無量寿経』の下巻に出てくる有名な言葉です。「兵」は兵隊、「戈」は武器。兵隊も武器も必要としない世界。人間が本当に敬い合える、信頼し合える、そういうまつりごと、政治を行おうではありませんかということが『無量寿経』の下巻に説かれているのです。

○ 御遠忌通信



「俱会一处」「摂取不捨」「怨親平等」

『阿弥陀経』の「俱会一处」というのは、あらゆるいのちあるものと共にという、その「共に」ということの根拠がここにあるというのが、「俱会一处」です。さらには、『観無量寿経』に出てきます「摂取不捨」。選ばず、嫌わず、見捨てない如来のところが摂取不捨。摂め取って捨てたまわず。『歎異抄』第一章にも「摂取不捨の利益にあずけしめたまう」と出てくる。さらに『華嚴経』には「怨親平等」という言葉が出てきます。「怨」が憎しみ合う相手、敵。「親」は親しい味方。つまり敵か味方ということで人間を見ない。人間はみんな平等だ。友同行、御同朋の教えです。

ともすれば敵か味方か、敵なら殺せ。これが娑婆を生きる政治の原理であり、現代の大きな戦争につながる考え方です。しかし、仏教では本来、人間というのは敵も味方もない、時に敵になったり味方になったり、親鸞さまも山伏弁円という、殺しにやってきた者と出遇い直して、その人が敵から味方になった。そういう敵か味方か人間を見ないことが、「怨親平等」という教えである。それが『華嚴経』に出てくる。『教行信証』の中にも「怨親平等」につながる言葉が「化身土巻」にある。

「神祇不拝」「国王不礼」

その「化身土巻」にもう一つ真宗の伝統として、「神祇不拝」と「国王不礼」という言葉があります。「神祇不拝」というのは、神々の絆から解放されていく。それは宗教を自分の利益のために利用することが必要ではなくなるという。

「国王不礼」というのは、国王という最高の権力者であっても、決してひれ伏さない。曇鸞大師には、あの時代の国王が却ってひれ伏して、「あなたこそ菩薩だ」と拜んだと、『正信偈』に書いてある。仏法者の方から、この人は国王だから、この人は偉い人だからといって、敬ったりへりくだったり、媚びへつらったりしないということ。「国王不礼」というのは仏教者の矜持、共有なのであります。

このように、お経に込められたのは「非戦平和の願い」であり、「一切の衆生と共に」というその精神。そのようなものを読んで分かり、聞いてうなずける日本語で朗読するということの意義を、こういう機会にご一緒に考えてはいかがかと思うのでございます。

チリの音楽家、ビクトル・ハラが残した言葉がございます。これはお経、『正信偈』、私たちの真宗の伝統にもつながります。

博物館に入ってしまうべきではない伝統文化や民族音楽がある。決して興味を失われたりしないで、世代から世代に受け継がれていかななくてはならないものだ。歴史の一つ一つの瞬間の中で、その本質が存在し得るように形を変えていかねばならないものが存在する。

「歴史の一つ一つの瞬間」、今で言う、われわれの現代でも、その本質が存在し得るように、お経を

○ 御遠忌通信



現代語訳すると言っても、ただ単に分かりやすくするとか、きれいにする、それだけではないのです。それは本当は難しい。とてもプレッシャーが掛かる。

なぜかという、下手をすれば、分かりやすいということは浅い軽いものになってしまう。つまらない、安っぽいものになってしまう。そうではなく、その本質が存在し得るように、親鸞の教え、蓮如の精神、その本質がちゃんと保たれていくように、でも、現在において形を変えていく。これが、子や孫に分かる言葉でということです。おじいさん、おばあさんの知恵を子や孫に分かる形で伝えていかなければならない。これが私のお話のタイトルに付けている言葉の意味です。

【正信偈の意識文（抄）】

さて、『正信偈』の意識（東京教区教化委員会制作）を前半だけ朗読したいと思います。全部読むと、これだけで20分ぐらいかかりますので。ちょっと朗読してみたいと思います。

先ほどからお鈴の代わりに鳴らしているのですが、いい音がするでしょう。この火箸は明珍という火箸です。兵庫県の名産の一つです。姫路で代々、江戸時代から武器、甲冑や刀のつばをつくってきた業者があるのです。ところが、江戸時代の終わりごろから、いよいよ国内の戦乱も少なくなってきたわけで、武器をつくる業者もだんだん仕事がなくなってくる。そこで、明珍という兵具屋さんは火箸に切り替えた。

この火箸がものすごくいい音をするのです。風鈴に似ている。風鈴にもなるし、こうした儀式のときの小道具にもなる。私は、『阿弥陀経』や『正信偈』を読むときのお鈴の代わりによく使います。

これは非常に優れたもので、この音に目を付けたのがソニーです。ソニーは、20年ほど前世界最高のマイクロホンをつくらうと思った。どこにも負けないマイクロホン。どんな小さな音でも聞き漏らさない、鮮明に伝える。

マイクというのは音響業界では、歌を歌う人にとっても、カラオケを歌う人にとってもマイクは大事。ああいうプロの世界では、1本70万円も80万円もするマイクがあるそうです。ソニーがそれを開発するときに、音の実験をするのに、いろいろな人の声や楽器を使っても、なかなかいい音の基本が取れない。そのときにたまたま見付けたのがこの火箸です。

この音を聞いて、ソニーの技術者がこれだと。これを元にサウンドチェックを重ねて、世界最高級のマイクロホンができた。今もこれは使われています。世界中のマイクとか音響業界では、この火箸を使います。これは、姫路にある明珍の本店かヤマトヤシキという百貨店でしか買えない。姫路の人は知っていますから、よくお土産にくれたりします。こういう静かな音。お浄土から吹く風のような感じがします。

では、『正信偈意識』の朗読をしてみたいと思います。

○ 御遠忌通信



「帰命無量寿如来 南無不可思議光。永遠の仏よ あなたの呼び声には私は目覚め 量りしれない寿に立ち返り 思いはかれない光に敬いを捧げます

法蔵菩薩 それは昔 国と王位を捨てて道求めておられたころのあなたの名 あなたは世自在王仏という師におつかえし 仏たちの世界の成り立ちと 国と人とのありさまを見きわめて みずから清らかな国土を建てようというすばらしい願いを打ち立て あらゆるいのちあるものと共に生きようというかつてない誓いをおこされました。

はるかに長い時間をかけて 思いを深め 数多くの願いを選びとり そのころをみずからの名のおさめ どうか私の名とそのいわれをよく聞きわけてくださいと願い成就の誓いをこめて十方の世界に呼びかけました。

あなたの名は世にあまねく光を放ち はかりなくはてしなく さまたげなくならびなく 炎のように燃え 清らかさ よろこび 深い智慧を輝かせ たえることなく思いや言葉では尽くせない光は 日月よりも明るく 世のすみずみを照らし あらゆるいのちがその光の恵みにあずかるのです。

こうしてあなたは 願いの国浄土の永遠の仏阿弥陀仏と成られ その名のりは南無阿弥陀仏という真実の言葉となり その言葉は人が生きて行く方向を正しく定めるしごとをしています。あなたのまごころは いのちの根源にはたらきかけ 私にまことのころをおこさせます。

私が生きるこの意味に目覚めて さとることができるとしたら それは〈必ずさとりに至らせる〉というあなたの願いが成就しているからなのです。

思えば 釈迦如来がこの世に出てくださったのは ただひとえに 海のように深く広いあなたの願いを説くためでありました。

濁った世界 悪い時代に生き 苦しみの海におぼれているいのちあるものは 仏のまことの言葉を信じるべきなのです。

信じ喜び愛するところがひとたびおこる時 煩いや悩みを断たなくても 仏のさとりを得ることができるのです。

凡人も聖者も 逆らう人もけなす人も ひとたびころを回せば みなひとしく救われるので あたかもさまざまの水がみんな大海に入って一つにとけあうようなものです。

仏のころは すべてをおさめとってすてない光であり 常に私たちを照らし まもってくださいます。すでに迷いの闇は破られているのですが むさぼりとらわれ いかり 憎しみの雲や霧が 常に仏の真実のころの空を覆ってしまいます。

それでも たとえば日光が雲や霧におおわれても その下が明るくて闇にならないように仏の真実のころは いつも澄み切っているのです。

まことの信をえて いのちの真実をみて敬い大きなよろこびに満たされたならば その時迷いの悪道を願いの力で 横にすみやかにとび超えてたちきるのです。

○ 御遠忌通信



すべての善や悪にしばられている人びとが 仏の願いを聞き 信じるならば 仏は〈ほんとうによくわかった者〉と言われます。この人を〈分陀利華〉と名づけるのです。それは泥に咲いて濁りにそまらない白蓮華です。

永遠の仏の願いを信じ 忘れずに名を称える念仏はおごりたかぶり あなどる悪い人たちには そのままの心では とても信じられないことです。信心をおこすことほど難しいことはありません。
「以下略」

たまたま先日、四国教区親鸞聖人七百五十回御遠忌法要がありました。この式典の中で四国の門信徒の方々が一文字ずつ『正信偈』の文書を綴った言葉をスクリーンに映しながら、この『正信偈』の現代語訳を順番に5人の人たちが朗読するという、現代の儀式を試みておられました。

【流れを汲んで本源を尋ねる(覚如の言葉)

絵解きの世界に誘われて】

私は親鸞聖人のご生涯を描いた『御伝鈔』に添えられた絵を絵解きするという営みも試みてまいりました。あるいは、「節談説教」と言われるものにも大変関心がありまして、ささやかな実験をしています。

しかし、この絵解きとか、節談説教というのは、明治時代の初めに東西本願寺ともに宗門から禁止されました。禁止されたことが何となく気になっていましたので、なぜこのことをもっと積極的に取り組まないのかという思いがありました。

私の絵解きの原点というのは、子どものころに見た、まぶたの奥に焼き付いた絵のことで、うちのお寺に二河白道の図を描いた掛け軸があります。お彼岸のときには二河白道。二河白道のことは、詳しく言わなくても皆さんご存じだと思いますが、川と水の図が、真ん中に白い道が一本ある。



その絵が床の間に掛けられて、私の祖父がそれを説明（絵解き）してくれるのです。右手に水の川が波を逆立たせ、左手には火の川が炎を燃え上がらせて、よく見ると1人の人が前方に手をかざして、一本の細く白い道を、足がようやく、片足だけが交代に行けば歩けるような細い道をたどって歩いて行こうとする。

○ 御遠忌通信



さらに全体を見渡すと、上の方には仏さまであるとか菩薩さまの姿が描かれている。下の方には、白道に行く人に呼び掛けているお坊さんたちの姿がある。後ろからは盗賊の群れが追い掛けてくる。対岸には猛獣が迫り、龍も泡を吹き、ヘビやムカデや、ハチなどもいる恐ろしい絵図です。いったいこれは何を表しているのだろうか。その物語を祖父がドラマチックに語ってくれるのを、ハラハラドキドキしながら聞いていたのが、私の原体験です。

大人になって、これが真宗の大切な聖教、真宗の聖典であります『教行信証』の「信巻」の中に、親鸞聖人が引いておられる善導大師の二河譬の譬えであるということを知ります。あの絵はこれだったのかと。

善導大師は、阿弥陀仏の国、浄土の世界観を深く探求して、自らも『阿弥陀経』『観無量寿経』の世界を絵で描いて、絵解きしていたと言われています。もちろん二河白道の物語も善導が創作して、自ら描いた絵描きでもあった。絵解きもしている。善導大師は絵解きの元祖だと私は思っています。

絵解きの図の元は、ルーツをたどってみますと仏教の曼荼羅と言われる、お釈迦さまの生涯を描いた彫刻や絵画、それがやがてタンカという掛軸になって、チベットやモンゴル、中国に伝わっていきました。どんなことが描いてあるのか、それを解説する絵解きが現れるようになりました。

日本でも熊野神社の熊野曼荼羅という掛軸があり、その日本最初の絵解きは熊野比丘尼という、その女性たちです。それが中国では唐の時代に大変流行致しまして、人々に分かりやすく仏教を語る、俗講という名の語りものが流行するようになります。それとともに目で見える仏教入門である絵解きも行われました。

日本でも絵巻物、掛軸とその絵解きが一時盛んになりました。つまり、絵解きは能や狂言・歌舞伎以前の小劇場だった。能や狂言が現れたのは室町時代、歌舞伎は江戸時代から伝えられた。それ以前、絵解きは何よりも大切な視聴覚教材、目で見える仏教入門。日本の絵巻物では、鳥羽僧正が描いたと言われている『鳥獣戯画』。アニメの元にもなりました。

いつの間にか、近代になって表舞台からは姿を消しましたがけれども、絵解きの系譜は形を変えて残っております。紙芝居やスライドがそうです。絵本も映画も、テレビゲームにも、この絵解きのルールがさりげなく取り入れられていると、私は見ております。つまり、あらゆる視聴覚媒体に流れている。

教団でも今日では、親鸞さんや蓮如さんに真宗の教えを学ぶ、ビデオやDVDなどがたくさん作られますが、私はそれもいいけれども、もっと原点に返って、視聴覚教材の原点である絵解きをもっとしなさいと言いたいです。

どこのお寺にも、報恩講になったら親鸞聖人の四幅の絵伝を掛けて、親鸞さまの恩徳を讃えるわけですから、そこに何が描いてあるのか自分たちで学んで絵解きをする。そういうことをもっと積極的にやらないと、宝物の持ち腐れになってしまうと、私は思っています。

○ 御遠忌通信



しかもそれを、私はできるだけ原初の形を復活させ、現代の言葉で表現する。自分のお寺でもこの20年、絵解きをやっており、その一つはDVDにもなっています。

親鸞聖人の伝記である『御伝鈔』の物語は、本来絵と字が一体になった巻物。その絵の部分だけをこうして掛け軸にしています。その絵を読んでいきますと、そこには親鸞の歩んだ仏道と、その道行きで出遇ったさまざまな師や友に関する、隠されたメッセージが描かれている。

一枚の絵の中に四季の草花や生き物、襖絵の中にもサインが隠されている。読み解いていきますと、なかなかこれも奥深い。昔はその絵解きがユーモアを交えて、泣かせて笑わせて行われてきたわけでございます。あまり面白すぎるから禁止されてしまったのではないかと思います。私も、そういういにしへの知恵を、子や孫に分かる言葉で説く現代の絵解きというのをしていきたいと考えております。

【節談説教への偏見と誤解を解く】

節談説教というのは、三河のご門徒だったら、節談説教師のお説教を聞いたことがあると思うのですけれども。言葉に節、抑揚を付けて行うということ。しかも、七五調で談じる。例えば、

「弥陀大悲の誓願を、深く信ぜん人はみな、ねてもさめてもへだてなく、南無阿弥陀仏をととなうべしと。ご開山のご旧跡は、二十四輩と多けれど、遠い旧跡を巡らなくても、ずっと近い旧跡があります。御和讃の一つ一つが、とりもなおさずご旧跡。一首一首の御和讃が極楽参りの道中記じゃ。一句一句の御和讃が祖師聖人をご案内。足で参るんじゃない。聞其名号 信心歓喜、耳から聞いてこころの内へ、一念帰命の信心でご旧跡を参ることができます。南無阿弥陀仏」

これが節談説教です。これが廃れてしまった。あまり面白すぎるので廃れていったのではないかと思います。

私は、これは大事だと思うのです。論理だけではなしに情に訴える。金子大榮先生はロゴス（論理）とパトス（情念）といたしました。理屈、知性、論理に訴える、言葉を使って説明するお話も大事ですけれども、こういうふうに昔ながらの七五調で。親鸞聖人も七五調で「御和讃」をつくっておられた。それに節を付けたらなぜいけないのか。節が付くからいかん。話が芸になる。あれは芸人がやること。パターン化された芸事だという批判があります。これは、非常に皮相的な意見であろうかと思います。

そもそも節を付けて法話することがいけないのだったら、お経も『正信偈』、念仏、「和讃」も「御文」も節を付けずに読んでみたらどうですか。朗読するだけだったら、ありがたくも何ともないわけです。自然に節が付いているからいいのです。

法話するとき、ああ、この「御和讃」ありがたいなと思ったときに、つい節を付けていただいでしまう。芸事みたいになってしまうからいかんということになったのかもしれませんが、私は節を付けても、本質さえ変わらなければ形が変わっても、いろいろなバリエーションがあって当然だと思います。

○ 御遠忌通信



何より私は、親鸞さまの大切にしておられた聖覚の『唯信鈔』というのを読みましたときに感心しました。聖覚というのは親鸞聖人の兄弟子に当たります。法然門下で天台宗の僧侶のまま、法然上人のお弟子になっています。一説には、聖覚は六角堂から吉水へ親鸞を導いた一人であるとも言われています。

ですから、その兄弟子の聖覚を大変信頼しております。この聖覚というのは安居院流という唱導、つまり、節の付いたお説教の名人だった。安居院流といえば聖覚の父の澄憲から、代々お説教をする世襲の家であったと言われていました。

『唯信鈔』は、真宗の『教行信証』と共に読まれる大切な聖典ではありますがけれども、知識的な教義のものだけではなく、節談説教のお手本のような気がしました。誠に巧みな比喻で本願の功德と信心の姿を書き現しております。

例えば、極楽浄土という素晴らしい世界を表現するのに、『唯信鈔』ではこんなふうにごうげまします。

「そのとき世自在王仏、二百一十億の諸仏の浄土の人天の善悪、国土の麗妙をことごとくこれをとき、ことごとくこれを現じたまいき。たとえば、やなぎのえだに、桜のはなをさかせ、ふたみのうらに、きよみがせきをならべたらんがごとし」

譬え話ですね。極楽浄土はどんなに素晴らしい世界であるかというのは、日本の景色で言うなら、二見の浦と清見ヶ関を並べたようなものだ。柳の枝に桜の花を咲かせたらまあ賑やか。具体的に分かりますよね。

高い岸の上で、下にいて上に上れない人に対して手を差し伸べて綱を下ろす。上から差し伸べられた綱を下におる者は上がるために、たどって行って上がればいいのに、たどって行っても大丈夫かな、綱が切れないかな、途中で落とされないかなと疑っていたら、上れない。『唯信鈔』では、

「仏力を疑ひ、願力をたのまざる人は、菩提のきしにのぼることかたし。ただ信心の手をのべて誓願のつなをとるべし」

こういうふうにごうげましているわけです。そのまま読んだら節談説教のテキストなのです。私はそのように読んでおります。読むだけでも、おのずと節談調になるわけです。そして、共に浄土に往生する。

この『唯信鈔』の最後もきれいな言葉です。

「今生ゆめのうちのちぎりをするべとして、来世さとのまへの縁をむすばんとなり」

親鸞さまはこの『唯信鈔』を何度も書き写し、御同朋に送っています。ただ、これを読みなさい。こういう漢文が書いてあるけども、こういう意味なんだという注釈を『唯信鈔文意』に書いておられます。このなかに有名な、「いし・かわら・つぶてのごとくなるわれらなり」という言葉が出てくるわけです。

ですから親鸞さまも、おそらく節を付けて歌を唄いながら語っていたのではないかというふうにも

○ 御遠忌通信



想像したりするわけです。そういうことから、私は節談説教への偏見を改めるべきではないかと思えます。

私も節談をしていた先人にはとても及びませんが、節談調のお説教というものをちょっと致しております。古来からのお説教本に、「鹿ヶ谷因縁」というのがございます。これは承元の法難、つまり、住蓮、安楽のもとで、後鳥羽上皇の女官である松虫と鈴虫という2人の女性が、発心、出家して消息を絶った。それが元で住蓮、安楽ら4名が死罪になり、法然上人、親鸞聖人は流罪になるという、あの法難のきっかけになった物語であります。これは歴史的事実であります。そこにまたいろいろな伝説、伝承が合わさりまして、松虫、鈴虫の物語として語り継がれるようになりました。

それを再構成して私は台本をつくりました。「流罪8百年、鹿ヶ谷縁起、住蓮、安楽と松虫鈴虫の物語」として語っております。

つまり、2人の女性が出家、発心したと。せざるを得なかった。これは『平家物語』にも祇王とい



う有名な、清盛に寵愛されて捨てられた女の話が出てきますが、彼女らも出家した。あの時代、権力にもてあそばれながら自分の生き方を貫こうとして、出家して尼になった女性は、人知れず、あるいは有名な人もいっぱいいたわけです。

住蓮、安楽の元へ駆け付けた、法然上人の教えを聞いて感動した松虫、鈴虫の2人。その2人がなぜ発心、出家せざるを得なかったのか。2人の女性の発心、出家というところ

にポイントを置いて、そこを捉え返すところから、法難というものをもう一度見つめていったらどうなるか。

ですから、私の説教のラストでは、住蓮、安楽が死刑になった後、法然、親鸞聖人が流罪になる。その後、あの松虫と鈴虫はどうなったのか。どこに行ったのかというお話に展開します。実は瀬戸内海の生口島という島へ流れ着いて、そこで生きながらえて暮らしたという伝説があります。

あるいは、その念仏を弾圧した張本人である後鳥羽上皇は、それからどうなったのだろうか。そこまで話をさらに広げます。皮肉なことにあの後鳥羽上皇は、承元の法難から14年後に、何と自らクーデターを起こします。承久の乱です。

後鳥羽上皇自らが院政どころでは満足できない、自分が頂点にもう一度返らないといけない、もう一度天皇の時代にしないといけないと立ち上がって、クーデターを起こすのですが、北条幕府に徹底的に弾圧されて、何と隠岐の島へ流罪になった。あの時代、天皇も島流しにされた。隠岐の島に行っ

○ 御遠忌通信



たことがあります、えらいところですよ。当時あんなところへ行ったらもう帰ってこられません。

そこで終わっていくわけですが、そこに『唯信鈔』を書いた聖覚が後鳥羽上皇と昵懇の中でしたから、ひそかに念仏の教えを送るのです。たぶん、『唯信鈔』を送っていた。それを讀んだ後鳥羽上皇の心に変化が起こります。

最後には、後鳥羽上皇は念仏に救いを求めるようになるのです。その心境をしたためた『無常講式』という名文が残されています。その名文はあの『白骨の御文』の元になった名文です。

それは、法然、親鸞のような、ひたすらな、専修念仏ではありませんでしたが、かつて弾圧した念仏に自らが、最後は帰依して念仏に救いを求めていった。その姿を親鸞さまも知っておられたから、晩年のお手紙の中で、「世にくせごとおこりそうらいしかば」という書き出しの中で、このことに触れておられます。だからこそ、「世のいのりにこころいれて」念仏を妨げる者も救われますようにと、いのような気持ちで念仏しようではありませんかと、御恩報謝の念仏とともに書いておられます。そういう手紙がございます。最後の結びに『正信偈』の言葉。「凡聖逆謗齊回入如衆水入海一味」で締めくくる。これが私のオリジナル節談説教でございます。

こういうふうには私は、伝統を現代に継承していくことを考えておりますが、そういう言葉を教える、『聖典』の言葉は「流れを汲んで本源を尋ねる」。このことは実は覚如上人が『報恩講私記』に「ながれをくんで本源をたずぬる」という名文句が出てまいります。私はその言葉が大変好きで、これによって親鸞の教えを、また初心に戻って学び直していこうと思うことでございます。

いろいろ乱暴な表現とか試みもありましたので、ひんしゅくを買った部分もあるかもしれませんが、どうか皆さん方も一緒に伝統を現代にどう生かすかということは共通の課題でございますから、これを機会に、この御遠忌を通して、一人ひとりの生き方の中で伝統を現代に表現するという生き方を打ち立てていこうではないかと願うことでございます。

この辺で終わりたいと思います。どうもありがとうございました。